朝鮮人慰安婦と日本人

元下関労報動員部長の手記

吉田清治

新人物往来社

朝鮮人慰安婦と日本人

昭和52年3月1日　発行

著　者　吉田清治

発行者　菅　英志　　発行所　新人物往来社

東京都千代田区丸の内3—3—1　新東京ビルヂング

〒100／振替口座　東京6-151643／電話東京(03)212-3931(代)

装丁／秋山法子

印刷　明邦印刷／製本　若林製本

定価はカバー・帯に表示してあります

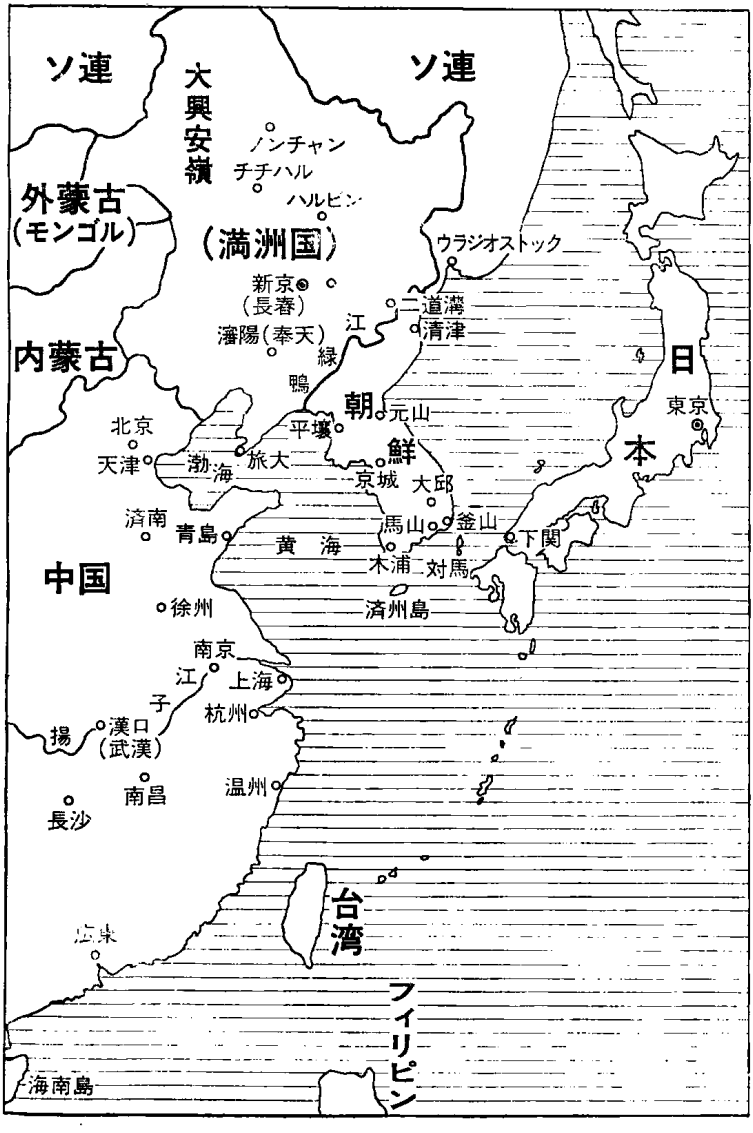
朝鮮人慰安婦と日本人――目次

一　半日本人　朝鮮に生まれた者は個性をなくしたくないんだ　7
二　第一乙吉田永達　きみは半島出身だね。殊勝なことだ　18
三　匪賊の処刑　若い朝鮮人で日本語の話せない者はいませんよ　29
四　冬の結婚　わたしの戸籍のほうがはずかしいんです　42
五　祝入営　召されて祖国の守りにつかれるのであります　51
六　十五年目の死　たかが匪賊討伐ぐらいで……　58
七　金九　金九のやつ、こんど会ったらぶち殺してやる　62
八　朝鮮人狩り　朝鮮人は関東大震災のことを忘れていないんです　71
九　徴用令書　なんなら今から九州の炭鉱へ行ってもらおうか　88
一〇　船艙の朝鮮人　総督府はひどいのをよこしたな。まるで敗残兵だ　98

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一二　臣道実践　朝鮮征伐には三人ずつ行くことにしよう　107
一三　大邱へ　二十歳前後の半島人はもうみつからんでしょう　115
一三　現地徴用　いいのがいました。二十一です。日本語もうまいですよ　122
一四　裸の二百人　牛もいっしょに徴用かけてすきやきにしよう　140
一五　朝鮮人女子挺身隊　からださえ一人前ならつとまるんだから　150
一六　慰安婦狩り　雑役婦だと言って募集するのはいい考えです　164
一七　女たち　対馬で一年働けば金ためて朝鮮へ帰れるぞ　179
一八　十九年四月十日　まるで一斉検挙ですね　190
あとがき　198
付録一　大日本労務報国会要覧（昭和十八年六月）　201
付録二　朝鮮人労務者活用ニ関スル方策（昭和十七年二月十三日）　225

朝鮮人慰安婦と日本人◈元下関労報動員部長の手記


ソ連
大興安嶺
ソ連
ハンチャン
チチハル
ハルビン
外蒙古
(モンゴル)
(満洲国)
ウラジオストック
新京
(長春)
二道灣
清津
瀋陽(奉天)
江
内蒙古
緑
日
鴨
朝
元山
東京
北京
平壤
鮮
天津
渤
海
旅大
京城
大邱
本
済南
青島
馬山
釜山
下関
黄
海
木浦
対馬
中国
徐州
済州島
南京
江
上海
子
杭州
揚
漢口
(武漢)
南昌
温州
長沙
台湾
広東
フィリピン
海南島

一　半日本人

昭和十二年

中国の東北地方に満洲国が建国されて五年目の春だった。私は東京の大学をでると満洲国国務院地籍整理局の官吏採用試験に合格して、首都新京の日系官吏養成所にはいった。養成所の三十人の官吏見習生のなかに、金永達という朝鮮人がひとりいて、寄宿舎で私と同室になった。

ある日金永達は私を近くの満洲国皇帝の仮宮殿前のひろばへつれだして、朝鮮人に国務院布告が発令されたと話した。国務院の朝鮮人官吏は日本人待遇から満人待遇に変更され、官吏見習生の金永達はその養成所の主事から、満系官吏養成所への異動を命令されたと語った。

金永達は目をうるませて話し終わると雑草のわき道へはいって行った。長身の肩をおとして日本人とおなじうしろすがただった。金永達は私とおなじ大学の一年後輩だったので、私は彼を朝鮮人と意識することもなくつきあってきた。東京生まれで小学校も中学校も東京だった金

永達は、日系官吏養成所の日本人見習生のだれよりも、日本語のことばづかいがきれいだった。端正な顔だちで金永達はあまりに日本人らしくなりすぎていて、満系官吏養成所の民度の低い満人たちのなかで、満人なみの地位と待遇になじめるはずがなかった。

仮宮殿の城門の衛兵所からでてきた満人兵士が、官吏の制服である協和会服を着た金永達を見て、直立して挙手の礼をした。衛兵所の満洲国国旗は、日本人・朝鮮人・満人・漢人・蒙古人の五族協和の五色旗だったが、建国後五年たって治安も確立したので、朝鮮人も満人なみの待遇にして、日本人とは格差をつけることになったのだ。

城壁のなかから軍馬のいななきが聞こえ、赤い落日の空には野鳥のむれが舞っていて、遠く守備隊の演習の砲声が断続して響いた。私はそのとき、金永達にたいして民族的な優越感をもって、無造作に自分の思いつきを話しだしていた。

「このさい、日本に帰化しないか」

「帰化なんて、許可されるはずがないだろう」

「日本人の戸籍に入籍することだよ。おれの養子になればいい」

「そんなこと、できないよ」

金永達は強く言いきったが、表情をやわらげていた。私は話を進めた。

「おれは両親もいないし、戸主なんだから、民法上だれでも養子にできるんだ」

「そんなこと、きみの親戚が許すものか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「きょねん叔父が死んだから、おれの世話をやく親戚はだれもいないよ」
金永達は私から目をそらしてだまりこんでしまった。楊樹の下を通ると微風で花綿が降ってきた。
「おれの戸籍謄本に、だれの名まえがのっても、文句を言うやつはもういないんだ」
私は両親を早くうしなって、子供のときから自分の戸籍謄本のみじめさに泣いて育ったのだ。
「将来、結婚のときなんかこまるよ」
「かまうもんか、戸籍なんて土地台帳みたいなものだ。おれの戸籍謄本には死んだ者の名まえばかり書いてあって、生きているのはおれひとりだ。きみの名まえがのったら、おれの戸籍謄本もすこしはにぎやかになっていいや」
「ぼくのために、どうしてそんなことをするのか」
「そんなにむずかしく考えるなよ。必要がなくなったら、いつでも戸籍を抜けばいいじゃないか。満洲国官吏になるには、日本人になってたほうがとくだろう」
「日本人になったら、とくをするかもしれないが、朝鮮に生まれた者は個性をなくしたくないんだ」
「戸籍を変えても、きみは個性を変える必要はない。満洲国官吏として働くには、きみはそれしか方法がないだろう」
金永達は立ちどまると、だまって私の顔を見つめていた。

「おれたちの年がひとつしかちがわないから、おれの養子になっても親子のまねはできないが、ただおれの戸籍を利用して、いっしょに満洲国で働こうよ」

そのころ新京在住の日本人の戸籍事務は日本大使館で扱っていた。翌日の午後養成所の講義がおわると、私は金永達をつれて大使館の近くの代書人事務所へ行った。代書人は銀ぶちのめがねをかけた気むずかしそうな老人だったが、私が事情を説明するとすぐ養子縁組届を毛筆で書きはじめた。保証人ふたりの記入欄や印鑑をおすところにえんぴつで丸じるしをつけてくれて、書類に印鑑がそろったら大使館へ届けてあげますと言って親切だった。私たちは養子の手続きが思ったよりかんたんなことに安心して寄宿舎へ帰った。

寄宿舎は兵舎のような長い平屋建てで、別むねに食堂と大きな浴場が建っていた。この浴場は男湯と女湯にしきってあり、午後六時の入浴時間になると、女湯は近所の宿舎の日本人官吏の奥さんたちでにぎやかになる。女湯とのしきり板が節穴だらけだったので、寄宿生たちは午後六時からの夕食を大急ぎですませて、のぞき見のため浴場へ殺到していた。寄宿生のほとんどが同時に入浴しても、みんな物音をたてないようにして、しきり板の節穴にへばりついているので、いつもこの時間の男湯は静まりかえっていた。

私は竹内と馬場に養子縁組届の保証人になってもらうため浴場へ行った。私の説明で金永達が満系養成所へ移されることに同情して、ふたりは保証人になることをすぐ承諾してくれた。

浴場にいた者はみんな私の話を聞いていたので、のぞき見のひとりが「あの奥さんは、朝鮮ピー（売春婦）みたいに毛がうすいぞ」と言ったがだれも笑わなかった。私が朝鮮人を入籍するというので、私が朝鮮人になったかのように、みんなは私の前で朝鮮ピーの話をすることにはこだわっていた。

竹内と馬場は入浴をすますと私のへやに来て、養子縁組届に保証人として本籍・現住所・氏名・生年月日を記入して捺印した。

「これできみも吉田か。吉田がふたりになってみんなまごつくだろうな」と竹内が笑顔で永達の顔を見ながら言った。

金永達から吉田永達にならねばならなくなった永達は、だまって澄んだ目を伏せていた。私は机の上にグラスをならべてビールをついだ。皆が乾杯すると、永達は「ありがとう」と低い声で言った。

次の日に代書人が養子縁組届を大使館に提出してくれた。十日ばかりたって本籍地の市役所から、新しい戸籍謄本が郵送されてきたので、永達は日本人として地籍整理局へ戸籍変更届をだして、養成所の名簿や名札が「吉田永達」と書きかえられた。

地籍整理局の日系官吏養成所と満系官吏養成所の合同実習訓練が、南満洲鉄道沿線の海城県でおこなわれた。訓練は一か月間にわたり各屯公所（村役場）で農民地主の地券を審査して、土

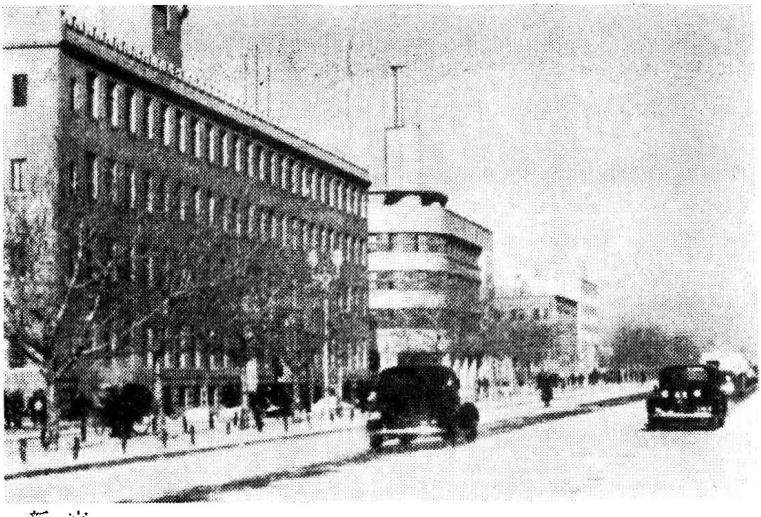
地台帳を整備することだった。

満洲の農民耕作地の土地所有は清国以来の古い地券によっていて、旧軍閥時代は国家的な調査がおこなわれなかった。広大な中国の東北地方には軍閥が割拠して、推定三千万の人口を養う農地は、長いあいだ実地踏査がされていなかった。日本政府は満洲国建国の基本政策の一つとして、航空写真測量で早急に国土の地図を作成し、農民耕作地の土地台帳を整備して、新しい徴税によって財政を強化しようとした。

実習訓練は踏査班を編成して、日系実習生三十人は監査員に、満系実習生百五十人は調査員として、十五班にわかれて県内各屯公所で作業をはじめた。私は教官にたのんで永達とおなじ踏査班に編成してもらい、ふたりで十人の満人調査員を指揮して、小湾屯の地籍整理に従事した。

小湾屯の耕作農民は約五百戸だったが、朝鮮人李一族が屯内の三分の一の農地を所有していて、海城県第一の富農だった。鉄道沿線数キロを占める李一族の農地は、五千分の一の航空写真地図数枚にわたり、その中央部に貨物駅千山があった。一帯は千山山脈から流れる千山河が貫流して、豊富な水量で灌漑のよい農地は大豆をはじめすべての農作物の適地だった。

満人調査員たちの話によれば、李一族がこの土地を所有するようになったのは三年前からで、以前は張家のものだった。海城県は張学良将軍の出身地で、県内各屯に将軍の親族の所有地があったが、満洲事変後には関東軍は張家のような敵性農民を追放した。瀋陽で関東軍の御用商



新京

人だった朝鮮人李が、建国後の奉天省公署からこの土地の払い下げを受け、一族のひとりが日本人の夫人をつれて住みついて、「李大人」と呼ばれていた。千山駅前の大きな李邸は、海城県警察署の満人巡警が警備していた。

実習がはじまると、屯公所は廊下から炎天の庭まで農民の列がつづき、さわがしい土語のなかで調査員が地籍整理の手続きを説明していた。私と永達は実地監査と地籍事務に没頭した。

ある日調査員が「李大人」の夫人を監査員室へ案内してきた。夫人は黒い緞子の満洲服を着て、満人風の束髪に金の耳飾りをさげ、金歯の笑顔でかるくおじぎをした。調査員がいつもの満語ではなく、すこし気どって北京官話で報告した。

「李大人の地券は奉天省公署発行です。審査は省略して認証しましょう」と言った。

李夫人も、海城守備隊の隊長さんがこの地券はこんどの地籍整理を受けなくてもよいといわれました、と言って行政事務にたいして無知だけでなくおごりの態度だった。私は調査員から地券を受けとって目をとおした。どの地券も記載の面積が地名から概算しても実地の十分の一以下になっていた。極端な地租の脱税だ。

「規則ですから、いちおう審査します」

「この地券はだめなんですか。主人は奉天軍司令部ととくべつの関係があって、この地券は軍の報奨金のようなものだったんですよ」

夫人は軍司令部の参謀の名まえをあげたりして、地券の権威を主張しはじめた。私は調査員に満語で「審査」を命じた。

「満人に土地をもたすより、半島出身者がもってたほうがお国のためですわ」と言いすてて李夫人は帰っていった。これは日本人が朝鮮でやったことを朝鮮人が満洲でまねをしたようなものだが、二十二歳の若い官吏見習生の私は、李夫人のことばや態度に反発していた。

永達が実地監査から帰ってきた。シャツをぬいで上半身はだかになって汗をふきはじめた。広い肩と厚い胸が汗で光っていた。

「屯長の騾馬はいいよ、調査員はだれも追いつけないんだから」と言って笑った。実地監査の帰りにまた調査員と競馬をやってきたのだ。屯長自慢の大形の騾馬を借りて乗りまわし、永達は実習に来てから活気がでてきた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com